大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『列仙伝』の異本と⊠続について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 輝幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004369

『列仙伝』の異本と畧続について

茨城大学　非常勤講師

久　保　輝　幸

はじめに

『列仙伝』は後漢に成立したとみられる古い仙伝書で、その最も古い出現は、2世紀末に応劭が『漢書』に下した注、および王逸が『楚辞』に残した注である。一方、現在通行する『列仙伝』の版本は、すべて明代正統年間の『道蔵』に収められた本が祖本となっている。そこで、『列仙伝』を後漢の思想資料として扱う場合、後漢から明の正統年間までいかに伝えられてきたのかを明らかにせねばなるまい。実際に、後漢から明代正統年間までの歴史は実に不明な点が多く、検証すべき項目は多岐にわたる。また筆者は現在のところ、出土史料中に『列仙伝』に深く関わるものが発見された話は耳にしていないが、その一方で、幸いなことに各時代の類書に多くの引用が残っており、その検証に資する資料も比較的豊富である。『列仙伝』は道教に傾倒する六朝文人の間で読まれたり、商業出版を通して南宋や明代に民間に広まるようになったため、それぞれの時代の文献に『列仙伝』の断片が留められている。

それらの断片は本稿で逐次紹介されてゆくであろうが、明代以降も道蔵本『列仙伝』が増補され、肖像入りの『（有像）列仙全伝』などが大量に出版された。さらに民国時代でも広く読まれていたらしく、魯迅･周作人兄弟も『列仙伝』について言及している。まず、魯迅は『中国小説の歴史的変遷』（1924年）で、次のように述べたこともある。

> …ですから、以上あげた六種の小説は、すべて偽作です。ただ、このほかは、劉向の『列仙伝』が、ほんものです…劉向の『列仙伝』は、当時においては、意図して小説を作ったのではありません。真実の事柄とみなして作ったのです…『列仙伝』や『神仙伝』にある断片的な神話は、いまでも、よく児童向けの読物の材料にします[1]。

また実弟の周作人は随筆「列仙伝」で、天仙を拒む馬明生が金液を半服して地仙となった故事を挙げ、「地仙になりたいという気持ちは子どもの頃から変わっていない」と

述べる[2]。当随筆の題名は「列仙伝」となっているが、馬明生はむしろ普通『神仙伝』に登場する仙人だ。このように、周兄弟は幼い頃に『列仙伝』や『神仙伝』を読んだことがあったようだ。周兄弟の例に限らず、歴代の多くの知識人が彼ら自身の著作に『列仙伝』の断片を留めている。これらの史料をもとに、成立から明代までの約 1300 年間、『列仙伝』は如何に伝えられたか、多少なり知ることができる。そうした『列仙伝』の歴史を扱う準備として、本稿では先ず『列仙伝』の異本について触れておかねばならない。何となれば、類書などに残る『列仙伝』佚文は、六朝以降に現れた様々な仙伝書――『神仙伝』や江禄の十巻本『列仙伝』、『桂陽列仙伝』など――と交錯していたため、旧題劉向撰の『列仙伝』の足跡をたどる際、その佚文中において、それらの異本との混淆がどのくらい影響を与えたかにも注意が必要である。このうち『神仙伝』は葛洪撰であることから訳書も研究も比較的多いが、江禄撰『列仙伝』10 巻や『桂陽列仙伝』などは、あまり研究されていない。

また、前稿で挙げた丁次卿と馬明生の 2 伝は主に『芸文類聚』や『太平御覧』など勅撰類書に『列仙伝』を典拠とした引用が散見されるものの、『仙苑編珠』『雲笈七籤』『歴世真仙体道通鑑』などの道教の総合書で引用される『列仙伝』の引文には決して現れない[3]。つまり唐朝から北宋までの中央政府が所蔵した『列仙伝』には丁次卿と馬明生の２伝が含まれていたが、道教書の編纂者たちは、その２伝を含まない別本の『列仙伝』を目にしていたようだ。逆に、馬丹・女几・谷春の各伝は『正統道蔵』などの道教叢書に引かれているが、現存する勅撰類書には引かれていない。『列仙伝』の引用における勅撰類書と道教叢書の違いは、それぞれの編者が参照した『列仙伝』に大きな相違があったことを伝えている。

そこで本稿では、まず『列仙伝』の異本について整理する。異本についてまとめたうえで、次稿で旧題劉向撰の『列仙伝』について詳しく述べたい。現行本は上下 2 巻の構成で、各伝に孫綽の讃が付されているが、『隋書』経籍志では劉向撰と題する『列仙伝』は 3 巻本と 2 巻本が著録される。この 2 種の『列仙伝』に違いはあったのかなど、歴代の書目や記録を調べることで、『列仙伝』の旧態に迫りたい。

1. 『列仙伝』の異本

『列仙伝』は 72 人の伝があったと伝わるが、現行本は 70 伝で構成される。しかし類書等に残る『列仙伝』佚文を 72 伝を大きく超える。その理由として、『列仙伝』には異本があり、類書等の撰者が利用した『列仙伝』であるのか明記しなかったためとする

考えがある。例えば、カルタンマルクは江禄が著したという『列仙伝』に注目し、次のように述べる。

> 多くの引用文は別の『列仙伝』十巻に由来しているようだ。この著作は6世紀梁朝の江禄によって著わされた（南斉36, 13a）。この著作が唐代にも残存していたが、中国の類書の編者は常に引用した書物の名称をはっきりと書かなかった。これらの引文についても同様で、利用する際はこの点に留意すべきである[4]。

また『隋志』には「『列仙伝』三巻、劉向撰、䨓続、孫綽讃」とみえ、『列仙伝』に続編が存在したかのように記録される。本稿では、この続編に加え、前述の江禄撰『列仙伝』十巻や『桂陽列仙伝』などの『列仙伝』の異本について考えたい。

2.『列仙伝』続編と叙

『隋志』では、3巻本『列仙伝』に「劉向撰、䨓続、孫綽讃」と記されており、その原注には「䨓続の上、一字脱するに似たり」とある。䨓が名で、その上の姓が一字脱しているらしいと、原注は言うのである。これにしたがい、『四庫全書総目提要』の編者陸費墀らは、孫綽の讃は本来1巻にまとめられて巻末に付され、全3巻であったものが、後に各仙人の讃が各伝の直後に移されたため、2巻本になったと推定した[5]。しかし3巻本の旧態が分からない以上、「孫綽の讃は本来巻末に付された」という前提そのものが推測の域にある。

前稿で示したように、各種類書の『列仙伝』佚文で道蔵本にないものは、書名が類似する他書に同文が確認できる。これらを除けば、現行本の70伝とほぼ同じであるので、「続伝」らしき存在の影は見当らず、一巻を為すほどの続編があったとは考え難い。なお『列仙伝』続編らしき書に『続仙伝』があるが、これは五代の沈汾による作なので、『隋志』編纂以降の著作である。つまり、『続仙伝』は『列仙伝』の続編とは関係ない。

このように䨓の「続伝」があったという根拠は、『隋志』の「䨓続」2字以外になく、その存在を証明できる十分な根拠はない。そこで改めて『隋志』の「䨓」がそもそも人名なのか、人名であれば、姓なのか名なのかという問題から考えてみたい。

姚振宗は『隋書経籍志考証』において、『魏志』孫度伝に䨓弘という人物が記録されることを指摘し、䨓は姓であろうと考える[6]。また興膳氏らも「䨓は姓で、下に一字脱するか」とする[7]。「䨓」が姓であれば、「続」は名である可能性が高く、『提要』とは異なり、むしろ「続」の下に一字あった可能性が高い。また䨓姓は極めて珍しく、訛字の

可能性もあろう。ともかく三国時代の人物に𪜈姓の者がいるので、𪜈は姓とみるのが穏当な解釈である。そもそも原注の筆者は『列仙伝』の続編を実見して、これを記したのではなく、「続」が続編だと推測し、「𪜈続の上、一字脱するに似たり」という一つの解釈を挙げたにすぎない。さらに、原注の筆者が「𪜈」を名と認識した点から推測すると、「𪜈」と「続」の間には空白がなく、つながっていたのかもしれぬ。「𪜈」が姓であれば、「𪜈続」が人名であったとも考えられるのではなかろうか。つまり「一字脱する」のではなく、讃に孫綽作と𪜈続作の２種の讃も含まれていたとも考えうる。また、「続」の下に「叙」などの一字を欠いたとみることもできる。このように「𪜈続」は「続編」以外の可能性も含めて考える必要があろう。

なお、「𪜈（続）」は𪜈弘そのひと自身であるとする見方もある[8]。史書によれば、𪜈弘は文学的素養がある人物であり、三国時代という時代も続編を書いた時代としてふさわしいというのが、その主な理由だ。しかし当説が正しいことを示すには「𪜈続の上、一字脱するに似たり」という原注が誤りであり、「𪜈」と「続」の間に一字が脱しているとの前提が必要であろう。

『列仙伝』の「叙」についても少し述べておきたい。『列仙伝』の叙は道蔵本では失われているが、『太平御覧』巻672をはじめとして[9]、『説郛』などの叢書にも見え、これを転載した現行本もある。叙の佚文は「『列仙伝』は漢の光禄大夫劉向の撰す所なり」の一文から始まる。この叙は劉向に偽託しておらず、その口吻から、『列仙伝』の撰者とは無関係に劉向の作と信じる者が後に当叙を書き加えたとみられる。さらに、台湾の王叔岷や張美桜はこの叙が『漢書』楚元王伝（附劉向伝）に酷似すると指摘している[10, 11]。ゆえに当叙は北宋以前の者が『漢書』から摘録したものとわかる。

また、道蔵本には劉向に偽託した総讃があり、「余、嘗て秦大夫阮倉『撰仙図』を得る。六代より今まで、七百余人有り」と述べられている。旧本では、この直後に、『仙経』あるいは『仏経』の文字があったようだ。しかし、このどちらも道蔵本にはなく、「始め皇は遊仙の事を好む」云々と続く。

一方、南宋のころ、天台宗僧の志盤は、当時通行していた『列仙伝』について、『仏祖統紀』（1269）で次のように批判している。すなわち、かつての『列仙伝』序には「七十四人已に『仏経』に見ゆ」とあったという前提のもと、彼は「今の書肆が板行する者は、乃ち『七十四人已に仙経に在り』と云う。蓋しこれ道流これを擅改するのみ」と述べているのである。たしかに北魏の顔推之の『顔氏家訓』や隋の杜台卿『玉燭宝典』に引用される『列仙伝』では、『仏経』が引かれていた。こうした記録から、南宋期に通行した『列仙伝』は、道蔵本にはない文を含んだ版本であったとわかるが、この点については次稿

で論じたい。

3. 江禄本『列仙伝』

前述の通り、類書等に残る『列仙伝』佚文を集めると、72 人を大きく超えた仙人の伝がある。先に述べたように、カルタンマルクは、類書の撰者らが旧題劉向撰本と江禄 10 巻本の出典名を共に『列仙伝』とし区別せず、江禄の 10 巻本の内容が引用されたためと考えていた。同様に、陳昱珍も『法苑珠林』所引の文献を分析した中でこう述べる。

> 諸書に引かれる『列仙伝』[の佚文] は劉向本にない文が極めて多い。『法苑珠林』巻 50 の「報恩篇」感応縁に引かれる「宋時呉子英」の記録は、『列仙伝』を典拠としているが（大正蔵 53 冊 665 頁上）、その事跡は劉向の [没] 後のことだ。故に劉向がこれを記すことはありえない。江禄は南朝梁の人。この記録は江禄『列仙伝』によるのかもしれない[12]。

このように、道蔵本にみえない内容が多く引かれる原因を江禄本の『列仙伝』に求めている説がある。そこで、本節では江禄の『列仙伝』について考えたい。

『南斉書』によれば、江禄は字を彦遐といい、その著作『列仙伝』10 巻は「世に行われた」という。また彼は江夷の曽孫で、兄の江曇が承聖初（552）年に亡ったので[13]、江禄は 500-560 年頃の人物と考えられる。『南斉書』に「世に行われた」とあるから、『列仙伝』10 巻は当時、広く読者を得ていたらしい。そのため他書に引用された佚文があって当然のように思われるのだが、『隋志』にも著録されず、唐宋代の諸書においても「劉向列仙伝」と標榜する引用も多々みられる一方で、「江禄列仙伝」と表示したものは一例も確認できない。『太平御覧』引書目にも、旧題劉向本と『桂陽列仙伝』が確認できるが、江禄の『列仙伝』は確認できない。もし本当に江禄本の内容が類書に残っているのなら、「江禄（撰）」と明記した引用があってしかるべきところだ。唐宋代には撰者佚名となったのかもしれないが、類書中にも芸文経籍志等にも「江禄」や 10 巻本の痕跡が残っておらず、加えて前稿で既に論じたように、類書に残る『列仙伝』の佚文も多くが書名の転記を誤った結果とみなせるもので、10 巻を構成する程の豊富な内容をもつ異本『列仙伝』の痕跡は見いだせない。現存史料から判断すると、江禄の『列仙伝』は隋朝を待たずして散佚したとみるべきだろう。

なお 10 巻本という構成から、同じく 10 巻本とされてきた『神仙伝』との関連も思

い起こされるかもしれない。しかし『三国志』裴松之（372-451）注に「葛洪神仙伝」と冠した引用が２則みえることから[14]、江禄より前に葛洪『神仙伝』が存在していたとわかる。また同時代の陶弘景は 11 歳の頃、葛洪の『神仙伝』を得て、昼夜問わず研鑽に励み、養生の志を持ったという[15]。この故事からも、5 世紀後半ごろから『神仙伝』が広く流布していたと想像される。よって江禄も既存の『列仙伝』ではなく、葛洪の『神仙伝』を参考にして『列仙伝』を著したのではなかろうか。とすれば、現行本『神仙伝』は、江禄が旧本に増補し、10 巻としたものが祖本という可能性も否定しきれない。また、『隋志』に載る『集仙伝』10 巻（撰者不詳）も候補として考えうるが[16]、広く読まれたという点で疑問が残る。いずれの場合も「神」や「集」の一字が「列」に書き誤れば、『列仙伝』となる書名である。また『列仙伝』は魏晋間の文献にも引かれており、江禄が現行の『列仙伝』の撰者とは考えられない。

4.『桂陽列仙伝』および成武丁と蘇耽の伝

『列仙伝』を典拠とする佚文として、『北堂書鈔』に成武丁の伝、『芸文類聚』および『太平御覧』に蘇耽の伝が引かれる。『列仙伝』の旧本には成武丁や蘇耽の伝が含まれていたのだろうか。

表１　成武丁と蘇耽の各伝の佚文

	『列仙伝』佚文	『桂陽列仙伝』佚文	『桂陽先賢伝』佚文
成武丁	『北堂書鈔』巻134（罩白繖）	『北堂書鈔』 巻148（臨武失火以酒救之） 『太平御覧』 巻29（元日），巻736（術）	『北堂書鈔』巻73（主簿） 『芸文類聚』巻85（粟）， 『太平御覧』 巻345（刀上），巻840（粟）
蘇耽	『芸文類聚』 巻90（白鶴），95（鹿） 『太平御覧』巻906（鹿）	『水経注』巻39（馬嶺山） 『太平御覧』巻189（井）	『芸文類聚』　巻65（園）， 『太平御覧』 巻824（園），巻970（梅），巻984（薬）

（『桂陽先賢伝』は『桂陽先賢画賛（讃）』『桂陽先賢記』という書名でも引用される）

成武丁や蘇耽の伝は『太平御覧』巻 13 に『神仙伝』から「成仙公」「蘇仙公」の名で引かれており、ともに「桂陽の人」とされる[17]（現行本『神仙伝』巻 9 もほぼ同文）。さらに『北堂書鈔』や『太平御覧』では『桂陽列仙伝』を典拠として成武丁の伝が引かれている。また『水経注』や『太平御覧』では、同様に『桂陽列仙伝』を典拠として蘇耽の伝が引かれている。これらの引用に加え、清末の陳運溶が『麓山精舎叢書』において行った『桂陽列仙伝』や『桂陽先賢伝』を加えて[18]、表１にまとめた。成武丁の伝は『北

堂書鈔』で『列仙伝』と『桂陽列仙伝』の両方から引用があり、蘇耽の伝は『太平御覧』で『列仙伝』と『桂陽列仙伝』の両方から引用がある。また、『桂陽列仙伝』成武丁伝の佚文は『太平御覧』巻 29 と巻 736 に 2 則あるが、その内容は字の異同があるものの同一の内容である。その内容は、『北堂書鈔』に残る『桂陽列仙伝』佚文と同じ逸話である。

『北堂書鈔』巻 148 臨武失火以酒救之『桂陽列仙伝』曰。「成武丁、正直文会、成武持杯不飲、固以酒潠庭間、有司将弾之也」[19]

『太平御覧』巻 29、巻 736『桂陽列仙伝』曰。「成武丁、正旦（且）大会、以酒沃庭（廷）中、有司問其故。対曰臨武県失火以酒救之遣験（騎）果然[20]」（括弧内は巻 29 と巻 736 字で字の異同ある所で、その巻 736 の字を表する）

文字や表現に大きな違いがあるが、酒席で成武丁が酒を庭に撒き、武臨県で酒の雨が大火を鎮めた話を引く点は一致している。『北堂書鈔』では「臨武失火以酒救之」が大字で書かれ、その直下に小字双行で『桂陽列仙伝』を引かれる。この引用の体裁は『太平御覧』と異なるため、李昉ら『太平御覧』の撰者が『北堂書鈔』から当佚文を引用する際、その文に手を加える必要に迫られたはずだ。それ故、『太平御覧』と『北堂書鈔』の両書に残る佚文に多少の違いが生まれている。このように、『太平御覧』の編者は『桂陽列仙伝』を直接参照したのではなく、『修文殿御覧』『北堂書鈔』など先行する類書から『桂陽列仙伝』の佚文を転載したのではないかと疑われる。たとえば、『芸文類聚』所引の蘇耽伝では「その鹿は形がふつうの鹿と同じである。険しい場所でも乗り越えてゆける」という流れになっている。『芸文類聚』の編者は引用を行う際に、文字数を減らそうと努めた傾向があり、引用には節略が多い。その結果として、この鹿の話のように、話の流れが繋がりにくくなっている。『太平御覧』の編者は、そうした部分に積極的に手を加えており、ここでは「鹿」の字を取り去り、逆接の「雖」を加えたり、「皆」や「騎而」を削ったりして、文意をはっきりさせた傾向がみられる。

『芸文類聚』巻 95　鹿『列仙伝』曰。「蘇躭与衆児俱戯猟、常騎鹿。鹿形如常鹿、
『太平御覧』巻 906 鹿『列仙伝』曰。「蘇躭与衆児俱戯猟、常騎鹿。形雖如常鹿、

遇嶮絶之処皆能超越。衆児問曰。『何得此鹿騎而異常鹿耶』。答曰。『竜也』」[21]
遇険絶之地・能超越。衆児問曰。『何得此鹿・・異常鹿耶』。答曰。『竜也』」[22]

『太平御覧』は先行する類書を藍本として編纂されたため、典拠の文献名も踏襲している。つまり、『太平御覧』に成武丁や蘇耽の伝が『列仙伝』と『桂陽列仙伝』の２種から転載される原因は、『太平御覧』の撰者が異なる２次資料から孫引きしたためである。もとは、ともに『桂陽列仙伝』が出典であろう。

なお『北堂書鈔』も『列仙伝』と『桂陽列仙伝』の２種が引用される。『列仙伝』を典拠とする巻 134 の引用は、現行本『神仙伝』巻９の内容によく似ている。成武丁の頭上にいた鳥が「白鵲」か「白鶴」かなどの若干の違いを除くと、ほぼ同一の内容なので、典拠を『神仙伝』とすべきところを訛って『列仙伝』になったためではなかろうか。

『北堂書鈔』巻 134

『列仙伝』に云う。「成武丁、使いして洛陽より還り、長沙の野樹の下に宿す。夜、樹上に人の語声有るを聞く。武丁、頭に乃ち二白鵲を見て、其の神異を知る。明晨に至り、市門に到り、二人の白繖を罩るを見る。武丁、『白繖の相従いて行くなり』と云う」と[23]。

また、『太平御覧』に引かれる『桂陽列仙伝』蘇耽伝は、酈道元の『水経注』に詳細な佚文が残っており、『太平御覧』の編者は以下の下線部をもとにして、短文に再編成したらしい。

桑欽撰『水経』酈道元注

『桂陽列仙（女）伝』に云う。「[蘇]耽は郴県の人。少くして孤となり、母を養うこと孝に至れり。言語虚無、時の人之を癡と謂う。常に衆児と共に牛を牧う。更直にて帥と為り、牛を録して散らせならかしむ。耽を帥と為るに至るたび、牛輒ち徘徊左右し、逐わずして自ら還る。衆児曰く。『汝直すれば、牛何ぞ道を走らざるや』と。耽曰く。『汝曹の知る所に非ず』と。即ち<u>母に面辞して、『受性は仙に応ず。当に供養を違うべし』と云い、涕泗す。又説く、『年将に大疫、死者略半ばす、一井を穿ち水を飲めば、恙なきを得るべし』と。</u>是の如く哭声有り、甚だ哀し。後に耽の白馬に乗り、此の山中に還るを見る。百姓壇祠を為立す。民安歳登、民因りて名づけて馬嶺山と為す」と[24]。

『太平御覧』巻 189 井

『桂陽列仙伝』に曰く。「蘇耽、母に啓べて曰く。『賓客来たりて躭に会う有り。受性は当に仙なるべし。今耽を招きて去る。供養に違える。今年疫多し。竊に此の井水有り、之を飲めば恙なきを得るべし。此の水を売ること供養に過ぐ』と。賓客をして随いて去るのみ」と[25]。

このように、『太平御覧』に残る『桂陽列仙伝』の佚文を精査してみると、先行する現存諸書に同様の佚文を見つけることができる。つまり『太平御覧』の編者は『桂陽列仙伝』をみることができず、他書に残る佚文に頼るほかなかったのであろう。そのため『芸文類聚』から孫引きした佚文は、典拠が『列仙伝』とされるという相違が生じた。なお『太平御覧』の引書目には『桂陽列仙伝』が挙っているが、『太平広記』にはなく、また『崇文総目』『宋志』等の経籍志に著録されないことからも、北宋の館閣に『桂陽列仙伝』はなかったと推定しうる。

なお『芸文類聚』巻 90 には『列仙伝』を典拠として蘇耽の伝を載せられるが[26]、これは『水経注』中の佚文にない。ただし現行本の『神仙伝』では、蘇耽が白馬に乗り馬嶺山に戻った後、白鶴が飛ぶ逸話があるので、実際には『神仙伝』からの引用かもしれない[27]。

以上のとおり、『桂陽列仙伝』は北宋期に既に散佚していたとみてよかろう。このように、当書は『列仙伝』よりも『神仙伝』と深い繋がりがある。さらに『桂陽列仙伝』には桂陽（今の湖南省東南部）に縁のある仙人が記されるので、あるいは『神仙伝』から桂陽に縁のある仙人を抜き出した摘録ともとれる。現存する文献の中で『桂陽列仙伝』の初出文献は『水経注』であり、北朝の酈道元がそれを著した時期と前後して、南朝では江禄が『列仙伝』10 巻を著している。加えて、桂陽は当時南朝の支配下にあった。そこで江禄の『列仙伝』が『桂陽列仙伝』であった可能性も以下に検討しておきたい。『桂陽列仙伝』は佚文中に数伝しか見いだせず、かつ桂陽という地方の仙伝であることから、1、2 巻程度の著作であったと想像される。したがって『列仙伝』の 10 巻本はやや大きすぎるようである。また、いかに江禄の 10 巻が広く行われたとはいえ、北魏の酈道元が南朝の江禄撰『列仙伝』を容易に入手できたとも考えにくい。両書は別本であったろう。また江禄は、桂陽を支配下においた南朝梁の人物であるから、その点において『桂陽列仙伝』の撰者として候補に考えうるが、『列仙伝』10 巻が『桂陽列仙伝』であるとは、やはり考えがたい。

5. まとめ

前稿では、類書の佚文分析を行った結果、『列仙伝』と題された佚文であっても、書名が類似する他書に同様の佚文がみられた。それら書名の誤記載と考えうるものを除くと、「まったく異なる内容を含む異本『列仙伝』が存在し、それから引用された」佚文は丁次卿と馬明生の２伝くらいであった。すなわち類書編纂の過程で、２種類の『列仙伝』が混用された痕跡は確認できなかった。

上記の経緯をふまえ、本稿では『列仙伝』の「続編」、江禄の異本『列仙伝』などについて関連史料を整理し、考察を加えた。その結果、『列仙伝』に続編が存在したという説は、『隋志』の記載以外に根拠はないことが分かった。『隋志』では、3巻本『列仙伝』について「劉向撰、嚴続、孫綽讃」と著録されており、さらに原注に「嚴続の上、一字脱するに似たり」とある。『四庫提要』等にみられる「続編が存在した」とする見解は当原注にある推定に、さらに推論を重ねたものである。ゆえに、まず原注の解釈や信頼性について慎重な議論が必要である。すでにいくつかの研究者によって指摘されているように、三国時代の人物に嚴姓の者がいるので、この嚴は姓とみるのが穏当な解釈と考えられた。すると、「嚴続」の２字で人名と考えることも可能であり、「続」が続編を意味するという『四庫提要』等の見解も再考が必要である。このように類書などの佚文に『列仙伝』の続編を示唆するものが見当たらないこと、また２種類の『列仙伝』が混用された痕跡が確認できないことから、本稿では「続編が存在した」という見解に十分な根拠はないことを示した。

つぎに、江禄本『列仙伝』についても検討を加えた。江禄の『列仙伝』は「世に行われた」と『南斉書』にあるから、『列仙伝』10巻は当時、広く読者を得ていたらしい。そのため他書に引用された佚文があっても不思議ではないのだが、『隋志』にも著録されず、唐宋代の諸書においても「劉向列仙伝」と標榜する引用も多々みられる一方で、「江禄列仙伝」と表示した例は一つもない。もし江禄本の内容が類書に残っているのなら、「江禄撰」と明記した引用があってしかるべきところだ。しかし、類書中にも図書目録にも「江禄」や10巻本の痕跡は残っていない。唐宋代では撰者佚名となったのかもしれないが、『太平御覧』引書目にも旧題劉向本と『桂陽列仙伝』があるだけである。こうした経緯から、隋代以前に散佚した可能性が高いことが分かった。

本稿では、さらに『桂陽列仙伝』についても調査した。『太平御覧』に残る『桂陽列仙伝』の佚文を精査したところ、先行する現存諸書に同様の佚文を見つけることができた。つまり『太平御覧』の編者は他書に残る佚文からの孫引きに頼っており、それはおそらく『桂

陽列仙伝』が北宋期に既に散佚していたためと考えうる。また『桂陽列仙伝』の佚文をみると、その多くは桂陽（今の湖南省東南部）に縁のある仙人の伝が記されており、それらは同時に『神仙伝』にも記載がある仙人なのである。このことから、『桂陽列仙伝』は『列仙伝』より、むしろ『神仙伝』と深い繋がりをもつ書であることが示唆された。以上のように、「続編」や、江禄本『列仙伝』および『桂陽列仙伝』は、類書などへの影響が極めて限られており、旧題劉向撰の『列仙伝』はこれらの書の影響をほとんど受けずに伝えられてきていることが分かった。次稿では、2巻本と3巻本の違いを中心に、道教書に残る『列仙伝』を追いながら、明代の『正統道蔵』までの歴史を明らかにしたい（関連年譜）。

表２　『列仙伝』関連年譜

<table>
<tr><th>時期</th><th colspan="2">事　　項</th></tr>
<tr><td>前 206 年～
前漢</td><td colspan="2">劉向（前 77- 前 6）『列女伝』等を著す</td></tr>
<tr><td rowspan="2">25 年～
後漢</td><td colspan="2">『列仙伝』の推定成書時期 （1）明帝～順帝（在位 57-144），（2）桓帝（146-167）</td></tr>
<tr><td colspan="2">応劭（-204）が崔文子と陵陽子の伝を引用（『漢書』注）
王逸（順帝頃？）が巨鼇の逸話を引用か？（『楚辞』注）</td></tr>
<tr><td>220 年～
三国</td><td colspan="2">魏の如淳が彭祖伝を引用
曹丕（187-226），曹植（192-232），嵇康（224-263）が参照か？</td></tr>
<tr><td rowspan="2">265 年～
西晋</td><td colspan="2">左思（300 頃）が参照か</td></tr>
<tr><td colspan="2">䨓氏による続編なる？</td></tr>
<tr><td>317 年～
東晋</td><td colspan="2">孫綽（314-371），郭元祖（晋代）が讃を作る（隋の事項覧を参照）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">420 年～
劉宋</td><td colspan="2">葛洪（283-343）が『抱朴子』『神仙伝』を著す．「劉向…所撰『列僊伝』僊人七十有余」と記す（『抱朴子』序）</td></tr>
<tr><td colspan="2">劉義慶（400-444）が商丘子胥伝の孫綽讃を引用（『新語』）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">502 年～
梁</td><td colspan="2">劉峻（462-521）が商丘子胥伝の孫綽讃を引用（『新語』注）</td></tr>
<tr><td colspan="2">陶弘景（456-536）が劉向撰『列仙伝』に 72 人の伝があると記す（『真誥』）</td></tr>
<tr><td colspan="2">江禄（500-560 頃）が『列仙伝』10 巻を著す（『南史』）</td></tr>
<tr><td colspan="2">『桂陽列仙伝』（撰者未詳）この頃成るか</td></tr>
<tr><td>[北魏]</td><td colspan="2">賈思勰が酒客，務光，丁次卿の伝を引用（『要術』530 年代頃）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">顔之推（531-590 頃）が「『列仙伝』劉向所造，而讃云七十四人出仏経」と記す（『家訓』）</td></tr>
<tr><td>[後魏]</td><td colspan="2">酈道元（469-527）が「劉向撰列仙伝」より簫史，文賓の伝を，また『桂陽列仙伝』から [蘇] 耽の伝を引く。（『水経』注）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">隋
581 年～</td><td colspan="2">劉向撰『列仙伝讃』の 2 巻本（郭元祖讃）と 3 巻本（䨓続、孫綽讃）、および郭元祖撰『列仙讃序』1 巻が著録される（『隋志』，621）</td></tr>
<tr><td>以下 2 巻本系統</td><td>以下 3 巻本系統</td></tr>
<tr><td colspan="2">杜台卿が劉向撰『列仙伝』に 72 人の伝があると記す（『玉燭宝典』）</td></tr>
<tr><td colspan="2">虞世南が 35 則を引く</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="6">唐
618 年～</td><td colspan="2">王懸河が巻上より崔文子，幼伯子，赤将子輿，偓佺，
巻下から昌容，子主の各伝を引く（『三洞囊珠』）</td></tr>
<tr><td colspan="2">欧陽詢らが 53 則を引く（『芸文類聚』624）</td></tr>
<tr><td colspan="2">『文選』六臣注に 83 則が引かれる（658/718）</td></tr>
<tr><td colspan="2">徐堅らが 45 則を引く（728）</td></tr>
<tr><td colspan="2">白居易が 29 則を引く（846）</td></tr>
<tr><td colspan="2">後の『旧 / 新唐志』に劉向撰『列仙伝讃』2 巻が著録される（945/1060）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">五代
907 年～</td><td rowspan="2"></td><td>3 巻本が江南に残存か？</td></tr>
<tr><td>王松年が 63 則を引く（『仙苑編珠』）</td></tr>
<tr><td>北宋
960 年～</td><td>李昉ら（978）が 10 則引く（『広記』）</td><td></td></tr>
<tr><td>北宋
960 年～</td><td>李昉ら（983）が 201 則引く（『御覧』）
欧陽脩ら「2 巻 72 人」とのみ記す（1041 成）</td><td>張君房が 48 則引く（『雲笈七籤』，1019）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">南宋
～</td><td rowspan="2">靖康の変で 2 巻本散佚か？</td><td>曾慥が 17 則引く（『類説』，1136）</td></tr>
<tr><td>陳葆光が 45 則を引く（『群仙録』, 1154 頃）
陳騤ら「3 巻 62 人」とのみ記す（『中興館閣録』，1178 成）</td></tr>
<tr><td colspan="2">書坊が 3 巻本をもとに 2 巻本を再編出版か？</td></tr>
<tr><td colspan="2">陳振孫が通行本を「2 巻 72 人」とのみ記す（1260 頃）</td></tr>
<tr><td colspan="2">志盤が通行本を批判する（1269）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">元
1271 年～</td><td>趙道一が 68 則を引く（1294 成）</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">陶宗儀が『説郛』を編纂</td></tr>
<tr><td rowspan="2">明
1368 年～</td><td colspan="2">『重較説郛』に 66 則引かれる（1368 刊）</td></tr>
<tr><td colspan="2">『正統道蔵』（1445 刊）</td></tr>
</table>

注

1　今村与志雄（訳）『魯迅全集（11）中国小説史略・漢文学史綱要』学習研究社（東京）、1986 年、569 頁。

2　鐘叔河（編）『周作人文類編（6）花熬』湖南文芸出版社（長沙）、1998 年、434 頁。

3　前稿「『列仙伝』の亡失した仙伝 2 則について」では、表 1 において『太平御覧』巻 803 の佚文を「鄭仲甫」の伝として挙げたが、その内容は道蔵本『列仙伝』の江妃二女に現れる内容であったことが判明した。そのため、「道蔵本外の佚文数」は 42 則（前稿では 43 則と記す）が正しい。また表 4 において、赤松子の『初学記』巻 23 の 2 則のうち 1 則は赤将子輿の佚文、偓佺の『芸文類聚』に巻 88 および『太平御覧』巻 953 が欠落、師門の『太平御覧』は全 3 則、また江妃二女の『太平御覧』に巻 803、桂父の『初学記』に巻 23（裴氏広州記）、犢子の『芸文類聚』に巻 17 がそれぞれ欠落していた。

4　Max Kaltenmark, *Le Lie-sien Tchouan: Biographies Legendaires des Immortels Taoistes de*

L'antiquite Universite de Paris (Beijing: Centre d'etudes sinologiques de Pekin, 1953), p. 6.

5　余嘉錫『四庫提要弁証』香港中華書局（香港）、1974 年、1203 頁

6　姚振宗『師石山房叢書（隋書経籍志考証）』開明書店（上海）、1933 年、332-333 頁。

7　興膳宏、川合康三『隋書経籍志詳攷』汲古書院（東京）、1996 年、397 頁。

8　陳洪、《列仙伝》成書時代考、『文献（季刊）』第 111 期、2007 年、45-52 頁。

9　李昉ら『太平御覧』中華書局（北京）、1980 年、2995 頁。

10　王叔岷『列仙伝校箋』中央研究院中国文哲研究所籌備所（台北）、1995 年、170-172 頁。

11　張美櫻『《列仙、神仙、洞仙》三仙伝之敘述形式与主題分析』花木蘭文化出版社（台北）、2007 年、16 頁。

12　陳昱珍、《法苑珠林》所引外典之研究（『法苑珠林》所引の非仏教文献の研究』）、『中華仏学学報』第 6 号 313 頁、1993 年。

13　李延寿ら『南史』中華書局（北京）、1975 年、945 頁。

14　陳寿ら『三国志』中華書局（北京）、1959 年、891、1192 頁。

15　文献 13、1897 頁。

16　魏徴ら『隋書』中華書局（北京）、1973 年、979 頁。

17　『太平広記』（中華書局（北京）、1961 年、90-94 頁）巻 13 でも『神仙伝』を典拠として、両仙人の伝を引く。

18　陳運溶『麓山精舎叢書』善化陳運溶麓山精舎（北京国家図書館索書号 10616）、巻 1-23ab。

19　虞世南『北堂書鈔』（董治安『唐代四大類書』第 1 冊、精華大学出版社（北京）、2003 年、670 頁）。

20　文献 9、136 頁 ; 3265 頁

21　欧陽詢撰・汪紹楹校『芸文類聚（附索引）』上海古籍出版社（上海）、1982 年、1648 頁。

22　文献 9 、4018 頁

23　文献 19 、577 頁

24　桑欽撰、酈道元注、楊守敬、熊会貞纂疏、段熙仲点校、陳橋駅復校『水経注疏』江蘇古籍出版社（南京）、1989 年、3215 頁。

25　文献 9、916 頁。

26　文献 21、1565 頁。

27　また『四庫全書』所収本の『北堂書鈔』巻 148 では平常生の伝として掲載されている。その事跡は『神仙伝』巻 9 の成仙公伝とほぼ同一であり、『列仙伝』平常生伝とは異なることから、「平常生」は「成武丁（成仙公）」の誤りであることは明白だが、

なぜこのような恣意的操作が加えられたのかは不明である。一方で『月令粋編』では『桂陽列仙伝』を典拠とした引用が一則ある。その佚文中に現れる老君（老子）と張道陵は今本『神仙伝』巻 4 に伝がある。